随想

〈第二十五回〉

旭中央病院 開院70周年に想う

市長　米本 弥一郎

旭中央病院が、今年で開院70周年を迎えました。昭和28年に一部事務組合として開院し、平成17年の市町合併で市立病院となり、平成28年からは地方独立行政法人へと移行して現在に至ります。

開院以来70年間変わることのない「すべては患者さんのために」という基本理念の下、健全な経営を堅持しながらも、社会情勢や医療ニーズに合わせて施設の規模や機能の拡充を図り、適正な医療を提供し続けています。24時間対応の救命救急センターでは、広域から患者を受け入れているほか、新型コロナの対応においては、県から重点医療機関の指定を受け、重症患者をはじめ多くの感染者の治療に当たりました。

千葉県北東部における基幹病院として、まさに地域医療を支えるリーダーの役割を担っています。

先日、東総文化会館で開催された記念式典では、これまでの病院の取り組みに対して、来賓の方々からお褒めの言葉をいただきました。私たちにとっては当たり前の存在ですが、雇用創出など経済面での貢献も含めて、その存在の大きさを再認識しました。このような大病院が身近にあるということは、とても安心で、本当に幸せなことだと感じています。

旭中央病院は、歴代の病院長をはじめ、職員一人一人の努力と、市民の皆さんに育てられてきた大切な宝であり、旭市の発展に欠かすことのできないものです。

少子・高齢化や人口減少など、さまざまな課題に対応するため、地域と共に歩んできた旭中央病院を核としたまちづくり「生涯活躍のまち・みらいあさひ」を、しっかりと進めていきたいと思います。